

最澄における天台修学期の再検討

英 亮

はじめに

本稿の目的は、最澄が天台修学を志した時期を再考することにある。全体的な筆者の関心は最澄の生涯における思想的変遷を説明することにあるため、本稿をその端緒としたい。

最澄〔七六六・七六七―八二二〕は、南都・大安寺の行表〔七二二―七九七〕のもとで修業に励み、延暦四年（七八五）四月六日に授戒し、同年七月に比叡山に登ったとされる。比叡山に入った理由としては、「無常観と自己反省から、禪につとめ、修行をするためであった」と想定される^①。このように、修行を目的として比叡山に入った最澄であったが、*「天台修学を志した時期」*に関しては、最澄の伝記である『叡山大師伝』に基づく説と、最澄が入山直後に撰述した『願文』に基づく説の二つに大別されてきた^②。『叡山大師伝』に基づけば、法蔵〔六四四―七一三〕の著作に天台教学を指南としている記述を見て、最澄は比叡山に入った後に天台修学を志した^③と推定できる。一方、最澄撰『願文』に基づく^④と、天台教学の用語が使われていることからして、最澄は比叡山に入る前から天台修学を志していた^⑤と予想することが可能になる。両説は一見すると矛盾した見解を示しているものの、この点を追究した研究は見られない。そこで筆者が検討を加えたところ、後者の『願文』説が妥当であるという結論に至った。したがって、

最澄は比叡山に入る前から天台修学を志していた。蓋然性が高いと言えよう。⁽³⁾ 本稿では以上の点を論述することにした。

なお、本稿の対象としては、最澄の伝記である『叡山大師伝』と最澄撰『願文』を中心に取り上げる。その他の書物に関しては、『叡山大師伝』ならびに最澄撰『願文』と関連する書物に限って考察の対象とした。

一、最澄の天台修学に関する先行研究の整理

一——『叡山大師伝』における最澄の天台修学

まず、『叡山大師伝』における最澄の天台修学を確認したい。『叡山大師伝』とは、「最澄の伝記の最も基本的なもの」とされ、⁽⁴⁾ 最澄の弟子である真忠「生没年不詳」が撰述したと考えられている。⁽⁵⁾ 『叡山大師伝』では、最澄が天台修学をはじめるときつかけについて以下のように記されている。

「比叡山に」六和敬は欠けることがなかったが、「仏教の典籍は」一山（比叡山）に限りがあった。そこで大師（最澄）は「仏教の典籍を」獲得し、「法蔵の」『大乘起信論義記』や『華嚴五教章』等に天台「教学」を尚んで指南としていることを披覧して、この文を見るたびに不覚にも涙を下した。「しかしながら」天台教迹を披閲する手段がなかったことに慨然とした。このとき「偶然にも」天台法門「に関する典籍」の所在を知っている人に邂逅・値遇した。これによって「円頓止観」、『妙法蓮華經玄義』、ならびに『妙法蓮華經文句』、『四教義』、『維摩經疏』等を写し取った。これら「の典籍は」唐「から本朝へ来た」鑑真和上の将来したものである。⁽⁶⁾

傍線部では、最澄が「法蔵の」『大乘起信論義記』や『華嚴五教章』等に天台「教学」を指南としていることを披覧し、天台修学を志すようになったかのように説かれている。この時最澄が披閲していたのは、法蔵撰『五教章』・『義記』にある以下の箇所と考えられている。⁽⁷⁾

◇法藏撰『五教章』(1)

七つ目に南岳慧思禪師および天台智者禪師に依ると、四種教判を立てて、東(中国)に流れてきた一代の聖教を統一し撰受した。⁽⁸⁾

◇法藏撰『五教章』(2)

この上記「に挙げた」十家「の仏教者は」教判を立てて、諸徳ならびに当時の法将であり、英悟絶倫であった。歴代「の僧侶にとつての」明らかな模範であり、「十家の」階位は測りがたいものであった。「その中でも」、「ただ慧思禪師および智顛禪師は、神異が「両者の間で」感通しており、足跡は交わって位にあずかった。「両者は」靈鷲山で「共に」法を聴いたことを深く忘れず今世にいた。「慧思と智顛に関する」ほかの神応は広く僧伝「に説かれる」通りである。⁽⁹⁾

◇法藏撰『義記』

止観を修行するというのは、静処にとどまって端座して意を正すことである。前の中に「静処にとどまる」というのは、これは止観を修行する縁等「を指す」のである。具体的にいうと「止観を修行する縁」に五縁ある。一つには閑居静処。(中略)二つには持戒清浄。(中略)三つには衣食具足。四つには得善知識。五つには息諸縁務である(中略)広くは天台智顛禪師「が著した」二巻の『小止観』に「詳しく」説かれる通りである。⁽¹⁰⁾

従前の研究では、傍線部の記述を最澄が披閲したことで、最澄は比叡山に入った後に天台修学を志したとされてきた。例えば、関口眞大「一九六九」(一七三)、安藤俊雄・蘭田香融「一九七四」(四七五)、佐伯有清「一九九四」(八三)は以下のように述べている。

◆関口眞大「一九六九」(一七三)

伝教大師は、若い時代に華嚴五教章と大乘起信論疏を学び、それらのなかにおいて、天台大師がつねに指南として尊尚されているのを見て天台大師を思慕し、ついに天台を宗とする志を決したと伝えられている。したがって天台大師を靈山聽衆とする思想は、はじめにこの華嚴五教章によって培われていたと推考される。

◆安藤俊雄・蘭田香融「一九七四」(四七四)

……入山中の思想模索の中で、しだいに「大乘起信論疏」(法蔵撰)や「華嚴五教章」(同上)などの華嚴の章疏に深い関心を示したことは当然である。そしてまたこれらの華嚴の章疏を通じて、天台の学説の存在を知り、それに注意を向けるようになったとしても不思議ではない。華嚴の学説が、天台の積義の指南をうけるところが甚だ多かったことは、上述のとおりだからである。(中略) 最澄はいわば、中国仏教の教学発展のあとを逆にたどる形で、唯識から華嚴へ、華嚴から天台へと到達するのである。

◆佐伯有清「一九九四」(八三)

比叡山に籠っている間に、法蔵の『大乘起信論疏』(『大乘起信論義記』)や『華嚴五教章』(『華嚴一乗教義分齊章』)などを読み、これらの経疏が、いずれも天台を尊び、指南としているのに導かれた最澄は、なんとしても天台の教籍を直接読んでみたいという強い衝動に駆られたのであった。

これらの見解は、天台教学を指南とする記述が法蔵の著作にあることを最澄が披閲したという『叡山大師伝』の記述に基づき、⁽¹⁾最澄は比叡山に入った後に天台修学を志したと推定するものである。

一―二 最澄撰『願文』における天台修学

一方、最澄撰『願文』に記載されている天台用語に着目し、最澄は比叡山に入る前から天台修学を志していたとする先行研究も少なからず存在する。それらを大別すると四つに分類できるだろう。

①最澄は、智顛説『摩訶止観』を披閲し、天台修学を志した。

稲葉圓成「一九二六」、塩入亮忠「一九三九」（一五、四三―四五）、関口眞大「一九七三（一）」

木内堯大「二〇一一」

②最澄は、法蔵の著作に引用される智顛撰『小止観』を披閲し、天台修学を志した。

関口眞大「一九七三（二）」

③最澄は、法進撰『威儀経疏』を披閲し、天台修学を志した。

佐伯有清「一九九四」（七二―七五、八二）、木内堯大「二〇一二」（五二四―五二五）

④最澄が比叡山に入る前から天台修学を志していたことは認めつつ、明確な根拠は示さない。

田村晃祐「一九八八」（三三三）、小林真由美「二〇二〇」

これらを順に確認していきたい。

①最澄は、智顛説『摩訶止観』を披閲し、天台修学を志した。

◆稲葉圓成「一九二六」

……古来最澄の天台修学期は非際伝の如く籠山以後の事として毫も疑を挟まなかった。それは丁度願文の述作を

籠山最初とすると同じように。しかし願文を仔細に研究すると、此の天台修学期を籠山以後とする説は修正されねばならぬ。若しそれが修正されるならば、最澄の叡山入りの動機に就いては従来の説に幾分の修正が必要となるわけである。

稲葉氏は最澄撰『願文』に天台教学の用語が使用されていると指摘し、その根拠として以下の点を挙げる。

- 『願文』にある「六根相似位」という語は、智顛説『法華玄義』等にあるように「天台独特の用語」であること。
- 「六根相似位」という語は最澄撰『願文』に三度使用される。その典拠は智顛説『摩訶止観』（『大正』四十六）「正修」章に含まれる、第九「能安忍」（同、九十九中）ならびに第十「無法愛」（同、九十九下）の箇所であること。
- 最澄撰『願文』には、五つの「心願」が挙げられている。その二願目に含まれる「不才芸」という語、また四願目に含まれる「不著世間人事縁務」という語は、『摩訶止観』「二十五方便」の、「息諸縁務」（同、四十二下）が典拠となっていること。

▪ 最澄撰『願文』にある、「無作無縁四弘誓願」は、智顛説『摩訶止観』「常境無相常智無縁。以無縁智縁無相境。無相之境相無縁之智。智境冥一而言境智。故名無作也」（同、九下）が典拠と考えられること。

▪ 最澄撰『願文』にある、「聖教噴空手」の典拠は、智顛説『摩訶止観』「当勤精進策勵身心。加意防擬思惟法相。分別選択善惡之法。勿令睡蓋得入。又当撰択善惡之心令生法喜。心既明淨睡蓋自除。莫以睡眠因縁失二世樂。徒生徒死無一可獲。如入宝山空手而帰」（同、四十五中）であること。

▪ 最澄撰『願文』に、「以無所得而為方便為無上第一義。発金剛不壞不退心願」とあるが、「無所得の空を方便とし、それに対して無上第一義を説くのは、天台の空仮中の三諦の思想である」こと。

稲葉氏は、これらの点を指摘した上で次のように述べる。

以上願文の上に顕はれた用語に就いて、天台家より借り来るものと思わる、ものを指摘したのであるが、これだけでこの願文が少なくとも天台の三大部を研究し且つ私淑した者でなくては書けないものであると断定するに十分であると思ふ。

このように、稲葉氏は最澄撰『願文』と智顛説『摩訶止観』の一致箇所を示すことによって、最澄が天台修学を志した時期は入山前であると主張している。

◆塩入亮忠「一九三九」(一五)

願文を拜読して見ますのにどうしても、天台の教養がなければ書けない点があります。五条の誓願は天台の摩訶止観の具五縁の思想を離れては考へられぬものであります。六根相似と云ひ、無作の四弘誓願と云ひ、何れも天台仏教の独特の用語であります。

塩入氏は、最澄が『願文』を著すには「天台の教養」が必要になると論じ、その根拠として智顛説『摩訶止観』にある「具五縁」の思想や、「六根相似」「無作の四弘誓願」などの天台用語を最澄が使用していることを挙げている。

◆関口眞大「一九七三」(一)

関口氏は、稲葉氏と二宮氏の両見解を挙げて「そのいずれにも充分には同意しがたい点がある」と前置きした上で次のように述べる。

……六根相似の位を得ざるよりこのかた、出版せじという伝教大師の誓願が『摩訶止観』に見られる三根出版の説の下根の出版と全く一致する(中略)すなわちもし伝教大師の願文の製作が天台大師法門の修学の後のことであつたと見るなら、その考証は、単なるいくつかの用語の教系などによってではなく、『摩訶止観』のこの一

段の所説との関係においてこそ考察されるべきであろう。

関口氏は、最澄撰『願文』に説かれる「六根相似」の箇所と智顛説『摩訶止観』との一致を説いている。この見解は、最澄が比叡山に入る前に智顛説『摩訶止観』等を披閲していたことを肯首するものだろう。

◆木内堯大「二〇一一」

最澄が六根相似位に至るまで出仮しないとすることに關しては、『摩訶止観』に見られる下根は十信の相似位、中根は五品弟子位、上根はそれ以前とする三根出家を根拠とすべきであり、自らを愚狂、底下の下根と置く最澄にとつて、六根相似位を出仮の段階とするのは妥当である。『叡山大師伝』の記述に基づいて、時系列を追えば、『願文』撰述、内供奉補任、法蔵著作に引用される智顛説への邂逅値遇、鑑真将来文献の入手となるが、『天台小止観』に加えて『摩訶止観』に關する知識も、『願文』撰述時点で最澄が既に持ち合わせていたことを認めざるを得ないと言えよう。

木内氏は、『願文』執筆時の最澄が智顛説『摩訶止観』等を披閲した形跡があり、入山以前から天台教学の知識を有していたと主張する。以上のように、①の説は『願文』執筆時の最澄が智顛説『摩訶止観』等をすでに披閲していたことを指摘する点で一致している。

②最澄は、法蔵の著作に引用される智顛撰『小止観』を披閲し、天台修学を志した。

◆関口眞大「一九七三（二）」

関口氏は①の自説とは別に、最澄が智顛撰『小止観』を披閲した上で『願文』を執筆したと述べている。

願文の作成はもちろん比叡山入山以後のことであろうが、もしそれが天台法門修学以前のことであるなら、その用語などはおそらくは起信論疏、華嚴五教章などに関連するものと見られる。またもし天台法門との邂逅以後のものであるとするなら、その全体の読破精研以後のこととするよりも、むしろまず天台小止観を披閲したころのものと考えることができる。しかも、起信論疏や華嚴五教章等において若き大師に下涙慨然させていたのは、じつはそれらのなかに天台小止観がくわしく引用されている部分についてなのである。

関口氏は、最澄が智顛撰『小止観』を披閲した上で『願文』を執筆したと指摘している。さらに、最澄が法蔵の著作を見て「下涙」したのは、それらの中に智顛撰『小止観』が引用されていたからであるとする。

③最澄は、法進撰『威儀經疏』を披閲し、天台修学を志した。

◆佐伯有清「一九九四」（七二―七五、八一）

最澄は、国分寺となる前の国昌寺と深い関係にあったのも事実なのである。（中略）一方、前述したように、かつて鑑真にしたがって日本に渡来した法進は、その著『沙弥十戒並威儀經疏』を、天平宝字五年（七六一）十月二十三日から同年十二月十七日まで、およそ二カ月をかけて、国昌寺において弟子の東大寺の僧慧山、元興寺の僧聖一、山田寺の行潜在講説したことがあった。この法進の講説にあたって、国昌寺の僧たちも聴講したことは、当然考えられるし、また『沙弥十戒並威儀經疏』が国昌寺において書写され、その写本が国昌寺に伝えられた可能性は、きわめて高いと思われる。法進の国昌寺での講説は、最澄が生まれる五年前のことであつたが、以後もなかく法進の講説の内容は、滋賀郡のみならず近江国の諸寺院の僧侶のあいだでは語り草となつていたのであろう。最澄が師行表のもとで仏教を本格的に修学するようになってから、最澄も法進の国昌寺での教説のことを聞き、

あるいは国昌寺にあった写本の謄写本の『沙弥十戒並威儀經疏』を繙読したことがあったかもしれない。「空手と噴めたまえり」という最澄の文も、法進の同經疏から得たことからの発想ではあるまいか。(中略) 以上見えてきたことから、最澄は、『小止観』などを繙読していなくても、法進の『沙弥十戒並威儀經疏』を熟読していれば、天台の教説に色濃く彩られている「願文」を書くことができたと思われる。

佐伯氏は、最澄が得度した先の国昌寺に伝わっていた法進撰『威儀經疏』を披閲し、『願文』を執筆したと推測している。

◆木内堯央「二〇二二」(五二四―五二五)

比叡山入山をはたし、『願文』を製するにいたった最澄の行業は、『天台小止観』の指示に添っていたということができる、それは、得度にかかわる法進撰『沙弥十戒並威儀經疏』所引の『天台小止観』が、真面目な求道心に燃えた最澄におよぼした深刻な影響に促されたものであったというべきではないだろうか。(中略) このようにみると、『願文』を書いたのも、大乘仏教を採ったのも、『天台小止観』の指示であるといえる。

木内氏の見解は、佐伯氏の見解とほぼ同様であることが窺える。このように、③の説は、法進撰『威儀經疏』に引用される智顛撰『小止観』を最澄が披閲し、『願文』執筆に至ったと見なしている。

④ 最澄は比叡山に入る前から天台修学を志していたことは認めつつ、明確な根拠は示さない。

◆田村晃祐「一九八八」(三三三)

問題は、『願文』に天台の実践論が用いられている以上、天台修学は比叡入山以前から行われていたのではない

か、ということである。(中略) 師行表の系統には天台の実践方法が参照されており、これが原動力となり、入山以後、華嚴の書物の言及を読んだことが契機となって、本格的に天台教学を学ぶようになったのが事実ではないかと考えられる。

田村氏は、行表「七二二―七九七」の「天台の実践方法」を最澄が受け継いだ後に、法藏の書物を披閲したことを契機として「本格的に天台教学を学ぶようになった」と見ている。

◆小林真由美「二〇二〇」

『願文』は、一九歳か二〇歳の若き最澄が、東大寺の戒壇で具足戒を受けた後、比叡山で籠山修行を始める際に書いた文章で、自らの修行の成就を誓う誓願文である。前文・五条の誓願・末文で構成されており、「四弘誓願」は末文に用いられている。四弘誓願の内容については書かれていないため、智顛の説をふまえている確証はないが、最澄がはやくもこの時期に「四弘誓願」を使用していることに注目される。

小林氏は明確な根拠は示さないものの、『願文』執筆時の最澄が智顛説『摩訶止観』に説かれる「四弘誓願」を用いていた可能性を認めている。

さて、これまで確認した①～④の見解はそれぞれ異なるものの、『願文』執筆時の最澄が天台教学に関する知識を有していたとする点は共通しており、これらは、最澄は比叡山に入る前から天台教学を志していたことを肯定するものである。

二、最澄の天台修学に関する筆者の見解

上記にまとめたように、最澄の天台修学のきっかけについては『叡山大師伝』に基づく説と、最澄撰『願文』に基

づく説に大別される。以下では、双方の説を踏まえて筆者の見解を提示したい。

まず、『叡山大師伝』説を再考する。この記述自体はゆるがせにできないものの、法蔵の著作と最澄の関係は検討の余地があると筆者は見ている。先ほど「――」『叡山大師伝』における最澄の天台修学で挙げた法蔵の著作を再確認し、問題点を指摘したい（傍線部は先に引用した箇所と同じであり、波線部は筆者が注目している箇所である）。

◇法蔵撰『五教章』(1)

七つ目に南岳慧思禪師および天台智者禪師に依ると、四種教判を立てて、東(中国)に流れてきた一代の聖教を統一し撰受した(中略)「智顛が設定した四教判の」四つ目に円教と名づけるのは、「法界自在」「具足一切無尽」の法門、「一即一切一切即一」等「を説く經典である」。¹³すなわち『華嚴經』である。

◇法蔵撰『五教章』(2)

この上記「に挙げた」十家「の仏教者は」教判を立てて、諸徳ならびに当時の法将であり、英悟絶倫であった。歴代「の僧侶にとつての」明らかな模範であり、「十家の」階位は測りがたいものであった。「その中でも」、「ただ慧思禪師および智顛禪師は、神異が「両者の間で」感通しており、足跡は交わって位にあずかった。「両者は」靈鷲山で「共に」法を聴いたことを深く忘れず今世にいた。「慧思と智顛に関する」ほかの神応は広く僧伝「に説かれる」通りである。また法雲法師のように、宗旨を開示するところに依ると、『法華經』を講説「するときに」、天から花を雨す等「の奇瑞」があった。「法雲の」神通の迹は僧伝にある。その余のもろもろの法師「に関して」も、修行や「經典の」解釈は超倫であり、「それらは」僧伝の通りである。¹⁴

(1)と(2)を通じて、筆者は三つの点を疑問視している。

■(1)の傍線部は、最澄が天台教学の影響を受けたと指摘されている箇所である。ところが波線部を見ると、法蔵は『法華經』ではなく『華嚴經』を「円教」の位に当てはめており、天台教判を忠実に受容していない。この箇所を最澄が披閲したとすれば、『華嚴經』を中心に据えた教学に関心が向いたとしても不思議ではないだろう。

■(2)の傍線部では、法蔵が智顛を称賛している。ただし、波線部では「十家」や法雲「四六〇―五二九」等の功績も讃えられているため、智顛のみを特別視する意図が法蔵にあったとは考えにくい。

■(1)と(2)のみならず、法蔵撰『五教章』・『義記』全体を通して、最澄が『願文』で用いている「六根相似位」や「無作無縁四弘誓願」などの天台用語が見られない。

以上の点を踏まえると、法蔵の著作が最澄に与えた影響は『叡山大師伝』の記述通りであった可能性は低い。したがって、これを無批判に採用することは避けるべきだろう。

続いて、『願文』に基づく①～④の説を考察したい。①では、『願文』に見える天台用語と智顛説『摩訶止観』との複数箇所及ぶ一致が指摘されている。現段階ではこれらの指摘をくつがえすほどの根拠は見あたらないため、もつとも信頼できる説と言えよう⁽¹⁵⁾。

②は、法蔵撰『義記』における「止観」の解釈が智顛撰『小止観』（大正四六、四六二下）に依拠していると示されている⁽¹⁶⁾。ただし、智顛撰『小止観』には「相似位」「四弘誓願」といった天台用語や、最澄撰『願文』にある「聖教噴空手」の典拠を見出すことができない。したがって、最澄が智顛撰『小止観』を披閲したのみでは『願文』を執筆することはできないと推察される。

③については、すでに伊吹敦「二〇一六」によって反論がなされている。

……最澄が早くに法進の『威儀経疏』を読み、そこに盛られた天台思想によって比叡山入山を志した、あるいは、

天台に関心を抱くようになったという説がある（中略）しかし、最澄はこの疏に言及しておらず、読んだこと自体確認できないのであるから、それを前提に論を進めるのは差し控えるべきであろう。

傍線部の指摘があるように、最澄が国昌寺において法進撰『威儀経疏』を披閲したことは現時点で確認できない。そもそも、国昌寺に法進撰『威儀経疏』が保管されていたことを示す資料は見当たらないため、伊吹氏の見解は妥当と言えよう。したがって、③の説は信憑性に欠ける。

④の説は、最澄が入山以前から天台教学を学んでいたことを肯首している。ただし、田村氏は「師行表の系統には天台の実践方法が参照されており、これが原動力となり、入山以後、華嚴の書物の言及を読んだことが契機となつて、本格的に天台教学を学ぶようになったのが事実ではないかと考えられる」としているが、行表が「天台の実践方法」を参照していたとする記述は管見の限り見られない。最澄が入山以前に天台修学を志していた可能性は極めて高いものの、それを知った時期に関しては今後の検討を要する。

以上、①～④の先行研究について私見を述べたが、現段階では①の説がもっとも信頼できると言えよう。このことは、最澄が『願文』執筆以前に天台教学を知っていた有力な根拠となりうる。

小 結

これまで確認した点をまとめ、小結としたい。まず、「一、最澄の天台修学に関する先行研究の整理」では、先行研究における「最澄は比叡山に入った後に天台修学を志した」とする説と、「最澄は比叡山に入る前から天台修学を志していた」とする説を整理した。この相違は、前者が比叡山入山以後に天台修学を行ったと示す『叡山大師伝』の記述に基づいているのに対して、後者は最澄が比叡山入山直後に記した『願文』に従うために生じたものである。また、後者の中でも、最澄が参照していた文献をめぐる諸学者の見解が分かれていた。

そこで、両見解の妥当性を「二、最澄の天台修学に関する著者の見解」において検討したところ、前者の根拠とする『叡山大師伝』の記述には不可解な点が見受けられ、全面的に受け入れることは避けるべきであると指摘した。一方で、後者の最澄撰『願文』に従う説は事実である蓋然性が高い。その根拠として、稲葉氏・塩入氏等が指摘する

最澄撰『願文』は智顛説『摩訶止観』を参照しなければ記せない¹⁶⁾という点が挙げられる。

後者の説が正しいとすれば、最澄は入山以前に天台教学を学んでいたと言つてよいだろう。¹⁷⁾最澄の入山時期は、南都における天台教勢が広まりつつあった時期とも一致しており、それらの環境下にあった最澄が天台修学に関心を抱くようになったと予想される。今後は最澄の周辺事情にも目を向けつつ、比叡山に登る前後の動向を検討したい。

【参考文献】

- 安藤俊雄・藪田香融「一九七四」『最澄』（日本思想大系四、岩波書店）
- 石田瑞麿「一九六三」『日本仏教における戒律の研究』（在家仏教協会）
- 稲葉圓成「一九二六」『伝教大師の願文に就て』（『仏教研究』七—三）
- 伊吹敦「二〇一六」『法進撰『梵網經註』について—佚文より窺われる特徴と最澄への影響—』（『印度学仏教学研究』六五—一）
- 鎌田茂雄「一九七五」『華嚴教学における止観』（『止観の研究』所収、関口真大編、岩波書店）
- 鎌田茂雄「一九七九」『仏典講座 華嚴五教章』（大蔵出版）
- 木内堯央「二〇一一」『日本における天台宗の形成 木内堯央論文集Ⅰ』（宗教工芸社）
- 木内堯大「二〇一一」『最澄の六即義理解について』（『印度学仏教学研究』六〇—一）
- 小林真由美「二〇二〇」『東大寺諷誦文稿』と最澄『願文』—四弘誓願の受容と「檀主の法会」—』（『成城国文学論集』四二）
- 佐伯有清「一九九二」『伝教大師伝の研究』（吉川弘文館）
- 佐伯有清「一九九四」『若き日の最澄とその時代』（吉川弘文館）
- 佐々木憲徳「一九八二」『日本天台の諸問題』（永田文昌堂）

塩入法道・池田宗謙・多田孝文「二〇一二」「天台仏教の教え」(TU選書九)

塩入亮忠「一九三九」「新時代の伝教大師の教学」(大東出版社)

白土わか「一九八〇」「時代風潮としての仏教思想と最澄」(『印度学仏教学研究』二八一—二)

関口真大「一九六二」「天台小止観の研究―初学座禪止観要門―」(第五版、山喜房仏書林)

関口真大「一九六九」「天台止観の研究」(岩波書店)

関口真大「一九七三(一)」「伝教大師願文の研究―特に五願の第一条について―」(榎田良洪博士頌寿記念『高僧伝の研究』所収、

山喜房仏書林)

関口真大「一九七三(二)」「伝教大師「願文」について」(『伝教大師研究』所収、早稲田大学出版部)

田村晃祐「一九七九」「最澄辞典」(東京堂出版)

田村晃祐「一九八八」「最澄」(新装版人物叢書、吉川弘文館)

富樫進「二〇一二」「奈良仏教と古代社会―鑑真門流を中心に―」(東北大学出版会)

仲尾俊博「一九七三」「日本初期天台の研究」(永田文昌堂)

二宮守人「一九三二」「伝教大師願文の研究」(『大正大学学会報』十二)

英 亮「二〇二〇」「南都における天台教勢と最澄への影響」(『大谷大学大学院研究紀要』三七)

堀一郎「一九四三」「伝教大師」(青梧堂)

三浦周行「一九二二」「伝教大師伝」(御遠忌事務局)

吉津宜英「一九八七」「華嚴教学への最澄の対応について」(『華嚴学研究』創刊号)

「一九九七」「中国華嚴学派の人々による天台教学の依用―特に天台への澄観の「依憑」に着目して―」(『天台大師研

究』所収、祖師讚仰大法会事務局天台学会)

註

(1) 田村晃祐「一九八八」(二五)。

(2) 最澄撰『願文』は、入山して間もない頃に著された書物であると見られる。この書は最澄の伝記である『叡山大師伝』

〔伝全〕五附録、三一五)にそのまま引用されており、入山直後の最澄の思想を知る上で重要な史料となっている。

(3) このことは、鑑真たちによる天台教勢を最澄が被っていたことの傍証となるだろう。詳細については、英亮〔二〇二〇〕を参照されたい。

(4) 田村晃祐〔一九七九〕(一一)。

(5) 『叡山大師伝』の選者に關しては諸説あるが、佐伯有清〔一九九二〕(五四)に依った。

(6) 六和無欠。一山在限。於是大師隨得。披覽起信論疏并華嚴五教等。猶尚天台以為指南。每見此文。不覺下淚。慨然無由披閱天台教迹。是時邂逅遇知天台法文所在人。因茲得写取円頓止觀。法華玄義。并法華文句疏。四教義。維摩疏等。此是故大唐鑑真和上將來也(〔伝全〕五附録、五一六)。

(7) 関口眞大〔一九六一〕(九八、一〇六一—一〇七)、佐伯有清〔一九九四〕(八三一—八四)。

(8) 七依南嶽思禪師及天台智者禪師。立四種教統撰東流一代聖教(〔大正〕四五、四八一上)。

(9) 此上十家立教。諸德並是當時法將。英悟絶倫。歷代明模。階位叵測。祇如思禪師及智者禪師。神異感通。迹參登位。靈山聽法憶在於今。諸余神応広如僧伝(〔大正〕四十五、四八一—一中)。

(10) 若修止者。住於靜処端坐正意。前中言住靜処者。是修止緣等也。具言之有五緣。一者間居靜処。(中略)二者持戒清淨。若修止者。住於靜処端坐正意。四者得善知識。五者息諸緣務。(中略)広如天台顛禪師二卷止觀中説也(〔大正〕四十四、二八三上—中)。

(11) 他にも、三浦周行〔一九二二〕、堀一郎〔一九四三〕(九四—九五)、石田瑞麿〔一九六三〕(一一八—一九)、仲尾俊博〔一九七三〕(一四—一五)、佐々木憲徳〔一九八二〕(九)、塩入法道・池田宗讓・多田孝文〔二〇二二〕(九)などが同様の見解を示している。

(12) 注一五を参照。

(13) 七依南嶽思禪師及天台智者禪師立四種教。統撰東流一代聖教(中略)四名円教。為法界自在具足一切無尽法門。一即一切一切即一等。即華嚴等經是也(〔大正〕四五、四八一上)。

(14) 此上十家立教。諸德並是當時法將。英悟絶倫。歷代明模。階位叵測。祇如思禪師及智者禪師。神異感通。迹參登位。靈山聽法憶在於今。諸余神応広如僧伝。又如雲法師。依此開宗。講法華經感天雨花等。神迹如僧伝。其余諸法師行解超倫。亦如

僧伝(『大正』四十五、四八一上―中)。

- (15) ①の説に対して、二宮守人「一九三二」による批判がなされている。二宮氏は、最澄の『願文』に見えるのは天台用語ではなく三論用語であると主張している。

然るに此願文は断じて天台学研究に未だ手を染めざる已前の大師の製作であり、願文中の用語を天台術語なりといふは極めて幼稚なる研究である事を、已下一一の字句に於て証明せば左の如し。

二宮氏はこのように述べ、①始覚②六根清浄位③四弘誓願④五神通⑤無作⑥無縁⑦第一義⑧無上菩提⑨金剛⑩安樂之果⑪照理⑫無所得という用語を挙げる。そして、この①～⑫までの用語は「上半前半に於て最も通俗に、願文中で天台術語と解されてゐるものすべてが三論用語である事を示し、後半に於て特に願文中の三論用語の特色あるものを挙げたのであるが(中略)此願文の文字だけは徹頭徹尾三論教学を中心とする奈良仏教を母胎として生れ出で得るものである事を断言……」している。しかしながら、稲葉氏等の説を否定するほどの根拠は有していないと見られる。

- (16) 佐伯有清「一九九二(二〇七)」によると、同様のことは、法藏撰『義記』の他所(『大正』四十四、二八四中)にも確認できるといふ。ただし、鎌田茂雄「一九七五」が指摘するように、法藏が智顛撰『小止観』に依拠しているのは「止観」の実践面であり、「止観」の理論自体ではない点は注意すべきだろう。

- (17) ただし、『叡山大師伝』(『伝全』五、附録五一六)には入山後に鑑真将来の天台典籍を求めていることが記されており、入山時点における最澄の天台教学理解は完全なものではなかったと見られる。

- (18) 英 亮「二〇二〇」。

【凡例】

- 一、旧字体は原則的に通行体に改めた。
一、送り仮名は原則的に現代仮名遣いに改めた。
一、参考資料等の頁数は、() 内に数字だけを記した。
一、文中の引用は、最初に「……」で示した。
一、人物の生没年は、「」内に数字のみで示した。

一、引用文中における傍線や（ ）等は、すべて筆者が記した。

【略号】

※その他の『妙法蓮華経』『大般涅槃经』『大方广仏華厳经』等の主要な仏典、ならびに『妙法蓮華経玄義』『妙法蓮華経文句』『妙法蓮華経玄賛』などの論疏については、慣例（『法華経』『涅槃经』『華厳経』『法華玄義』『法華文句』『法華玄賛』等）に従う。

『威儀経疏』……『沙弥十戒並威儀経疏』

『義記』……『大乘起信論義記』